

河北 騰 著

栄花物語研究

桜
楓
社

著 者 紹 介

かわ きた のぼる
河 北 騰

京都府生。

東京大学国文学科卒。東大大学院修了。獨協大学教授。

平安朝の文学、特に栄花物語専攻。

現住所 埼玉県新座市野火止853

栄花物語研究

昭和四十八年五月一日 印 刷
昭和四十八年五月五日 発 行

定 価 三 四 〇 〇 円

著 者 河 北 騰

発 行 者 及 川 篤 二

印 刷 所 暁印刷株式会社

東京都千代田区神田猿樂町二二一六

桜 楓 社

電話 四五六〇一二

榮花物語研究

目

次

第一篇 総論篇

第一章	栄花物語の研究史……………	七
-----	---------------	---

第二章	栄花物語の特色と主題の二元性……………	完
-----	---------------------	---

第三章	栄花物語の叙述法……………	七
-----	---------------	---

第四章	栄花物語の説話について……………	六
-----	------------------	---

第五章	栄花物語の説話・再論……………	六
-----	-----------------	---

第二篇 各論篇

第一章	「花山尋ぬる中納言」の巻について……………	二三
-----	-----------------------	----

第二章	「浦々の別」の巻について……………	二三
-----	-------------------	----

第三章	栄花物語・大鏡に見える中の関白家	一五〇
第四章	海月の骨―藤原隆家の人間像―	一六〇
第五章	「鳥辺野」の巻について	二〇四
結 論		二二九
第三篇	源氏物語との関連	
第一章	源氏物語著作時期の一考察	二二七
第二章	源氏物語人物考―明石上について	二五五
第三章	六条御息所について	二七〇
書評	山中裕氏著「歴史物語成立序説」	二九〇

栄
花
物
語
研
究

第一篇 総論篇

第一章 栄花物語の研究史

7 第一章 栄花物語の研究史

栄花物語は、その名称がかなり広く知られている割合に、研究という方面の歴史が浅いように思われる。例えば、かの源氏物語が、その成立後までもない十一世紀の末葉から、既に訓詁や秘訣などの伝統が始められたのに比べれば、中古、中世に於ける栄花物語の研究は実に微々たるものであった。それは何故かと言うと、この物語が恐らくは藤原撰関家によって、やや久しく秘藏されていたという事情があったのではないだろうか。その研究といっても、大抵はこれと並称せられる大鏡に加えて、歴史物語という名で付随的に言及される程度に過ぎない事が多かった。このような実情であった為に、栄花物語の本格的な研究は大いに遅れ、漸くその緒についたのは時代も下って近世末から近代に入ってから後のことであった。然も、実質的にこの物語を研究対象として、最も基礎的な校訂の事業が完成されたのは、昭和も三十年を過ぎてからの松村博司氏の業績に俟たねばならなかったのである。

写本それ自体が錯雑して居り、異文も乱れ行われていた栄花物語の本文を、実に四半世紀以上の日々と努

力を傾けて系統づけ、抛るべき定本を明確にしたのが、正に同氏であった。氏の業績は、誠に一つの時期を画する物であったと言えよう。

さて、このように研究史的には貧しい中世近世という時代ではあったが、次にその実情について、極く簡単に眺めて見ようと思う。

(一) 中世の研究

榮花物語に関して最も早く発言した一人は、武藏国金沢称名寺の二代目の長老劔阿である。彼はその著「日本紀私抄」の中で榮花物語について触れて居り、

榮^マ火^マ
 大隅守時持女
 赤染右衛門作

と記しているが、これが作者についての今日でも断定的な結論の得られない論議の、そもその濫觴となつた発言であらう。

併し、この「日本紀私抄」は文献として余り大きな信頼の置ける物ではないと言われて居り、榮花物語の作者についても、無条件に右の記録を信じ込んで赤染であると断言することは、大いに憚られるのである。唯、それにしても、作者をめぐるの発言であった点は、一応の注目に値する物である。

一方、本文の書写に目を移すと、小林正直氏旧蔵本の榮花物語は、十三世紀の中葉、つまり建永建長以前の書写にして、これが榮花物語の写本の内、最古の物であらうとは、松村氏の推定である。この点から見る

と、劔阿とはほぼ同時代に、栄花の筆写がなされ始めていた事を知るのである。

更に、今日の我々に貴重な本文を提供している三条西家本も、鎌倉中期を下らぬ古写本であり、古体をそのまま残している最も価値の高い完本である。これは、梅沢義一氏の現蔵と言われ、国宝でもあるが、建長年間までに、こうして栄花物語の書写が、限られた家門の中で行われた事実は注目に値する。

尤も、これより前に栄花物語目録が作成されていたようである。これは後京極摂政、藤原良経の作かと伝えられる物であるが、筆者未見である為に詳記する事を得ない。

次いで、ほぼ一世紀後に、かの徒然草の作者吉田兼好が、栄花物語の筆写を果たしているのは、確証もあり、甚だ興味深い事である。

兼好は、少く共二度は関東へ下向したことがあったと言われて居り、その際、称名寺にあった金沢文庫に滞在して、古典籍の書写や筆録などの事に当たったのであらうと推定されている。従って、この期間に栄花物語も書き写して、今日見る所の真蹟本を残したのであらう。但し、兼好真蹟本の内、現存するのは唯一巻「巻二五・嶺の月」だけなのは、誠に惜しまれる。

更に時代はやや下って十四世紀の終末、応永年間に、諸本系統の内、異本系と目されている富岡家蔵、甲乙の両本が写されたようである。(富岡家本を甲乙の二種に分つのは松村氏の説に従ったのである)

この様にして、現在我々が見る三条西家本、小林家本、富岡家本のそれぞれの祖本が成立したのである。以上の三本は何れも、如何に新しく見ても室町時代の初期を下らない物であり、和田英松博士の如きは、三条西家本と共に、富岡家甲本は絶対に鎌倉中期を下るまいとさえ推定しているようである。

他方、この作品を称して古くは「世継」と呼んでいたようであり、例えば看聞御記の中に、永享四年六月二十七日の記事として、「自_二内裏_一世継可_レ有_二觀覽_一之由被_二仰下_一之間、且廿帖進上」と記されて居り、又、その翌月の所に、「七月四日晴、内裏世継殘廿帖進_レ之。うつほ廿二帖同進_レ之。件本鳴滝殿御本也」とも見えていたのである。斯様に「世継」又は「世継物語」とも呼ばれた為に、一時大鏡と混同され、論議が錯綜したこともあったようである。

ともあれ、禁裡とか藤原氏とかの極めて限られた範囲の中にもせよ、栄花物語が斯くの如く読まれ続けた事が知られるのである。

併しながら、この作品について論議したり、或いは注釈を加えたり、まして秘事の伝授というような、所謂学問的な営みなどは未だ全く行われてはいなかったようなのである。宮中などで、この作品を享受するにも、多分に有職故実を知り得る為とか、服飾や儀礼の知識の為とかの目的が主なるものであったのだ。この点が、源氏物語のような文芸作品としての享受に比して、最も大きな違いであった事は、先にも言及した通りである。

宣胤卿記には文明十二年（一四八〇）四月の或る日「当番たるに依り参内せしに栄花物語を出だされ、校合せしめられたり」（原漢文）と記録が残されて居り、ここから見ると、栄花物語にも既に幾種かの写本が禁裡には存在していて、その本文にも混乱を呈し始めていたのではないだろうか。宣胤が、果してどのような本文を底本にして、どのような態度を持って校合の事に従ったのか、今日では全くもう推測する由もないが、この四月二十二日の記事は極めて興味深いものであると思う。

それから三年後の文明十五年に、近衛政家が「後法興院記」の中に、やはり栄花物語についての記録を残している。その該当部分だけを、今、摘記するならば次のようである。すなわち、三月三十日の条に、

「自禁裡^レ被^レ仰^下可^レ書進御双紙^{榮花物語}之由、自第一至第三可^レ書進云々。(略)自今日則立^レ筆。御双紙事度々被^レ責伏^二条頗令^二迷惑^一。於先規^二者、不^レ及^二覚悟^一事也。

つまり政家は、この物語を書写して進呈する仕事を承服してはいるものの、後土御門天皇から度々催促されて承諾し、その日から直ちに筆を起そうと決心した心の中は、すこぶる迷惑と感じているようなのである。又、先例や故実、規格などについても「覚悟」つまり、熟知しない事があるだけに困却しているらしい様子が推察せられて、面白いのである。

その二ヶ月後、五月二十七日の同じ後法興院記を見ると、「自禁裡^二先日之御双紙少々、可^二直進^一之由、被^二仰下^一。」と記されているので、この頃までには政家も、とにかく栄花物語の巻一や巻二ぐらいの筆写の功を終えたものであると思う。こういう案配にして、宣胤や政家のような藤氏の貴紳をして書写や校合をせしめられて、禁裡にも蔵せられていたのであった。猶、政家の写した第一帖は、他の人々の手になる諸巻と共に、今日、京都の西本願寺に所蔵されて居り、これを、西本願寺本と呼んでいるのである。第一帖には「月の宴」より「様々の悦」まで

の、合計三巻が含まれた。

同じ文明十五年に、三条西実隆は年漸やく三十歳の壮年に達していたのである。彼が、源氏物語を始めとする王朝文学の典籍伝承に、忘れてならない功績を残した事は周知の通りであろう。実隆は天文六年(二五三七)に八十三歳の長寿を全うして没したのであったが、その年齢からも明らかであるように、彼の生涯の

活躍は、中世末から近世にかけて続けられたのだと言っても誤りではあるまい。

彼の日記である「実隆公記」には、種々の注目すべき記録が散見しているが、栄花物語に限って見ても多くの記載がなされて居り、彼がこの物語に対して、大きな関心と愛着の念を抱いていた事を察することができる。例えば、ここには其の二、三だけを挙げて見ると、

「栄花物語、統世継本有_二沽却本_一 （東山殿御本也）、共以美麗、尤所望之物也。（文亀三年九月五日）

栄花物語 （十七冊金部）「不明」、北畠中納言材親卿、礼物式百疋□送。無_レ謂之由再_三雖_レ令_二固辞_一頻示之間（且受也力）。（永正六年十一月四日）

栄花物語 （去年感得本）、四十卷今日修_二一覽功_一、其後無_二沙汰_一適々終_二閑覧_一、自愛自愛。（永正八年三月七日）

右の内、北畠材親に譲渡（又は貸与）していたらしい栄花物語が、所謂三条西家に蔵せられていた前記の三条西家本であり、今日も現存していることは、誠に幸運と言わねばなるまい。

実隆は、右にも引いた通り栄花物語の或る一本に就き「尤所望之物也」と渴望の心を述べ、又「去年感得之本」を今日、一覽の功終りてと記しているように、この物語について多大の熱意と愛情とを寄せていたのであった。そして、この珍しい書籍を心静かに閲覧し終った強い感激の程を、率直に書き記している。

右の永正六年十一月四日の条に続いて、同月八日の所には「栄花物語代物百疋、今日遣之」と、入手の事情や代価が記されている事から、こうして彼の手に帰したのが、前記の東山殿に伝来の栄花物語であったのであろう。

猶、彼は永正八年頃までにこの物語を精しく閲読し、その要点と思われる所を書き抜いて、「栄花物語抜

書」と言うべきものを作成していたようである。彼の熱心な研究的態度には心打たれるものがあり、正に実隆に至って、栄花物語の研究はその一頁を記すことになったと言えるであろう。ここに、実隆の果たした大きな役割が存在するのである。

(二) 近世の研究

右のように実隆は、栄花物語を真実、尊重していたのみでなく、他のすぐれた古典に対してと同様、この物語を研究する態度を以て接していたのであった。前述の宣胤や政治家の仕事も決して看過することはできない。やはり栄花物語の研究史という観点に立つならば、この実隆に先ず指を屈する事になるであろう。「適々終閑覽、自愛自愛」という言葉は、大きな重みを以て私たちの心に迫って来るものがあるのである。

近世に入って、さしものに激しかった全国的な戦火も終熄すると、やがて泰平偃武の時代が訪れて来る。文化一般の水準が向上するにつれて、次第に古籍の整版本が印行される機運になり、寛永古活字本、或いは明暦刊本などと呼ばれる物が相次いで刊行されて、従来とは比較にならない普及度を以て、各地の大名や富家の所有物の中へと加えられて行くようになるのであった。

栄花物語も、この頃、次々と板行せられたのであり、先ず寛永年間には二十帖四十巻の体裁で古活字本が世に出た事は、あまねく知られている通りである。次いで承応年間には、挿絵が本文の中へ入ったいわゆる絵入抄出本（九巻）が刊行され、これを、便宜上、絵入九巻抄出本と呼んでいるのである。これは、かなり

広く流布された物のようで、内容は、物語中の各所を、全四十巻にわたって少しずつ抜き出し、それに古雅な挿絵を加えた整版本である。この挿絵は、もともとそれ自体が、例えば源氏物語絵巻のような一つの絵巻物であったのかとさえ考えられている。本文は他に目録系図が一冊の合計九冊から成っている。

次に有名な明暦刊本であるが、この栄花物語は合計二十一冊、一冊に二巻ずつ収めた本文二十冊と、他に目録系図一冊より成る。これは小型本であり、京都の今出川なる林和泉掾という者が、明暦二年に板行した旨、奥書に明記されている。栄花物語は、本書並びに寛永古活字本によって最も一般に流布するを得た為に、これらを諸本系統の上での分類では「流布本」系の本文であると言う。

猶、右記の林和泉掾はその奥書の中で「斯の栄花物語は赤染衛門の述作なり。尤も至宝なる物なるべし。この頃、数本を以て比校するに展転模写の誤りに、損落の文字、前後の錯簡、是非をわきまへがたき処は、本書に校合、清書せしめ畢んぬ」と、大きな自信を以て上板した由を記している。

併し、松村氏によれば、やはり誤脱や錯簡と認められるような個所が多く、恐らくは、古活字本をもとにしてその儘これを整版に改板したものであらうと言われている。(同氏著「栄花物語の研究」二十九頁)。

先年、筆者も一見に及んだ島原文庫の栄花物語系図(一巻)は、思うに此の近世初期の頃に刊行された物の一つが転々して、松平忠房侯の蒐書の中に入ったものではなからうか。

今日見られる栄花物語の写本の内、書陵部蔵本、内閣文庫本、神宮文庫本(甲乙丙の三本)、静嘉堂文庫本(甲乙)、大阪府立図書館本、及び久曾神昇氏本などは、何れもこの流布本から転写されたものであり、小異はあるけれども、祖本は同一なのであらうと言われる。